

謹賀新年

二〇一六年

申さる

2016年は申年

今年の干支は、十二支では9番目の「申(さる)」。

この申という文字は、稲妻を表しているといわれています。稲妻は屈折しながら、あちこちの方向に走ることから、「伸びる」、「申す」という意味で使うようになりました。この稲妻は天の神の威光を表し、神の発するものであるという考えから「かみ」の意味となり、「申」が「神」のもとの字になりました。また、なぜ「申」を「猿」に当てはめたかですが、当時は字を読めない人も多かったので、分かりやすく覚えてもらうためという説があります。

申年の人の特徴としては「器用で明朗活発。好奇心旺盛で要領がいい反面、落ち着きがない」といわれています。しかし「申」は「去る」に通じ、難が去ると信じられていて、申年の申の日に赤い下着を贈られると健康に過ごせる、などの諸説が現在でも残っています。今年は縁起物の赤を身につけて、健やかな一年を過ごしましょう。



常陸大宮市長
三次 真一郎

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、輝かしい新年をお迎えのことと心からお慶び申し上げます。また旧年中は、市政全般にわたり温かいご支援とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

昨年を振り返ってみますと、戦後70年を迎え、6月にはパラオ共和国から、大統領のご名代としてセシリール・エルデベエル官房長官をはじめ3名の方々がご来臨され、ペリリュウ島などで犠牲になられた市内の遺族の方25人が参加し、懇談会を開催しました。そして、これまでの友好関係をさらに深めるため、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会に出場されるパラオ共和国選手団のキャンプ地として誘致するため、12月25日に常陸大宮市推進本部を立ち上げました。

10月には、平成9年に秋田県大館市に住む小学生が町名の由来に関心を持ち、旧大宮町を訪問したことを機に交流が始まった大館市と、当市では初めてとなる友好都市協定を締結いたしました。

さて、国道118号沿いに建設を進めております「道の駅常陸大宮」も、愛称が「かわプラザ」に決まり、今年の3月25日にオープンいたします。農林業と商工業が連携した生産・加工・直売などの6次産業化を推進し、地域に根ざした新たなしごとづくり・産業づくりにつなげていくことで、地域の活性化を推し進めてまいります。

さらに、「新たな時代を生き抜く郷育立市(きょういくりっし)づくり」の推進にも力を注いでまいります。そして、「住んでよかった」「合併してよかった」と思えるふるさとづくり、市民一人ひとりが「もっと元気に」を合言葉に生活できるふるさとづくりに邁進する決意であります。

皆様には、本市のまちづくりに対し、今後ともご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げますとともに、新しい年が夢と希望に満ち溢れ、皆様お一人おひとりの笑顔が輝き、幸せを実感できる一年となりますことを心からお祈り申し上げ、新年のごあいさつといたします。



常陸大宮市議会議長
秋山 信夫

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、お健やかに新年を迎えられたことをお慶び申し上げます。

去年は、日本人が一昨年に引き続きノーベル賞を受賞したのをはじめ、ラグビーや体操、近くはスケートの羽生結弦選手の活躍など、スポーツの分野でも、世界を舞台とした日本人の活躍が目立ちました。

本市は、昨年10月に秋田県大館市と友好都市協定を締結いたしました。人的交流や教育、文化、観光、産業などの分野での連携が、共に発展する大きな契機となるよう、議会としても努力して参る所存でございます。

一方、去年は大きな災害に見舞われた年でもありました。9月の豪雨では尊い人命が失われ、本県においても、常総市では今なお大きな爪痕が残されております。

さらには、昨年を表す漢字が「安」という一文字であったように、世界的なテロの問題、マンションのデータ改ざんの問題などを含め、「安心」と「安全」が、これまでになく身近な問題としてクローズアップされた年と記憶されるのではないかと考えられます。

地域に安全が確保され、安心して暮らせるまちづくりは、国、地方の別なく、最も基本的な行政課題であります。地域防災計画についても、たえず見直し、議会からも政策の提言に踏み込むなど、市民の安心、安全を図るための施策の充実に一層力を入れて参ります。

今年は、道の駅「かわプラザ」がオープンになります。新しい地域の顔として誕生する大型施設には、多くの期待が寄せられております。未来に向けた地域活性化の拠点として、また、本市のシンボルとしても存在感を発揮できるよう、執行部ともども知恵を絞りたいと思います。

本年が希望の年、皆様にとって最良の年になりますようにご祈念申し上げ、年頭のごあいさつとさせていただきます。